

黃 道 光 課 月 報 (36)

1935年 5, 6 月 分 の 報 告

觀測者及び觀測數

氏 名	觀 測 地	5 月	6 月	觀 測 番 號
寺 町 忠 行	愛知縣豐山村	5	1, (2)	112—113
廣 瀬 永 治 郎	岐阜縣美濃町	2		
笹 部 榮 一	大阪府池田町	1		
本 田 實	鳥取縣八東村		(1)	50

5月 觀測は皆月末の西天であるが、最多數の寺町氏の觀測が未だ入手してないので概要にとどめる。明るさは例年の如く次第に淡くなり Ophiuchus の銀河の 2.0—1.5倍位、稍々昨年より明るいかな？黃道光の全體は Gemini から Cancer, Leo へかけて稍々黃道より北に偏してゐる。然し頂點はの東端即ち黃經 170° 附近。頂點より天頂附近の火星を趣えて光帶が見られてゐる。低部は金星と銀河のため不確である。

6月 東天の觀測は寺町氏と本田氏の獻身的大努力により、今年のレコードであつた6月18日がそれぞれ17日と3日早められて光課にとつて實に喜ばしい次第である。寺町氏は6月1日と2日の二早曉で本田氏は14日の早曉である。明るさは寺町氏は Lacerta 及び Cepheus の銀河の 1.5—1.0 倍位と見られ、本田氏は北極空の3.0 2.5倍と見て居られる。寺町氏は頂點を Capricornus 附近に認められ本田氏は Pisces 中であり、外形も地平に低いためか不明瞭頂點の偏りは寺町氏は南偏、本田氏は稍々北偏で中心線も稍々北傾してゐる。尙寺町氏は稍々消長を認められてゐる。本田氏は例によつて屈曲した不規則光斑を觀測してゐられる。勿論土星が Aquarius 中に頑張つてゐる。

西天は寺町氏の一個のみで5月の延長の様である。明るさは Ophiuchus の2.0 1.0倍位で頂點は Virgo 中で(黄經 170°) 北へ 6° 偏してゐる。

5月、6月は 例年觀測數の少ない時期であるが、今年は割合に多數を得る事の出来たのは課員諸氏の努力がうかがわれる。尙寺町本田兩氏の6月東天の成功は實に賞讃に値するものと感謝に堪えない。

今9月は日濠國際同時觀測を正式に開始しましたから課員諸氏を初め本會々員も振つて御参加下さる様祈つてやみません。尙この9月の期間と時間は急報にのりましたが更めて掲ぐる次第です。

朝		夕	
日	濠	日	濠
9月7日—10月5日	3h 00m 4h 00m	20h 00m 21h 00m	

廣瀬永治郎記

黃道光の國際的中央局が花山におかれる

去る7月11日より同17日まで佛國パリに開會された國際天文同盟の報告は最近續々到着するが、その總會席上(新聞紙にもせられた通り)わが岩手縣水澤にあつた緯度變化の中央局がイタリイに移され、その委員長は英國の Jones 氏が任命された事により、日本の學術界は悲憤と寂寥を感じてゐるが、その代り、ここによろこばしいことが出来た。即ち國際天文同盟第22委員會(流星部)よりの報告によれば、今般流星部委員長は米國の Olivier 氏辭職のためベルギイの De Roy 氏新任され、この機會にこの第22委員會の一部分として、黃道光課を新設、その課長に山本博士が推薦されることとなつた。これは昨年末以來日本と濠洲との間に黃道光國際觀測の組織を促進するに至つた Stratton 氏等の推薦によるものと思はれる。山本博士はこの榮職を受諾し、尙ほ花山に黃道光の中央局をおく旨を返事した。この新設の黃道光課國際委員は目下のところ山本氏(日本)、Hoffmeister 氏(ドイツ)、Donitch 氏(ルーマニア)、Cap 氏(ブラジル)の諸氏であるが、これは更に増員される筈。これにより日本の黃道光觀測者は色々の意味に於て一層責任の重いことが感ぜられる。(花山急報第167號より)

變光星課報告 (30)

倉 敷 小 山 秋 雄

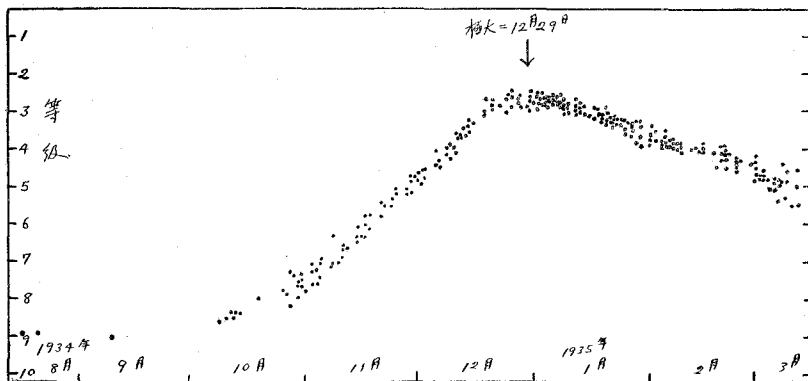
7 月中の觀測報告數

觀測者	今津績	木邊成磨	加藤孝一	沓掛七二	高井傳典	笹部榮一	伊達英太郎	佃 泰三	鈴木一男	小澤喜一	井澤一男	西川英男	西井宗一	荻部進	安井研二	渡邊恒夫	勝浦茂雄	荻部守子	合 計
單 數	10	15	7	7	4	9	0	7	0	9	1	11	7	19	5	0	7	5	54
觀測數	87	60	83	16	31	54	0	26	0	134	23	46	58	134	18	0	73	8	851

●本年一月以來の多數に上る報告を受けた。 ●南米の勝浦氏より4月中の觀測の報告を送られた事は喜ばしい。

ミラ(くじら座オミクロン星)の増光近づく

下圖は變化星界の代表者と見られる有名なミラの昨年(1934年)の極大時の觀測で全部本會會員の目測によるものである。極大日は12月27日と定められたが、此の時の光度は平常の極大より明るく2.7等級に達した。週期は略330日であるから本年はこれより約一ヶ月早く、11月下旬最大光輝に達する筈で、本誌の現れる9月上旬より急激に増光しやがて小望遠鏡にて見える様になる。本年は果して何時最大光輝に達し、且何等級に迄上るであらうか。(觀測用星圖は倉敷天文臺内小山宛申込の事)



流星課月例報告 (54)

(1934 年十一月)

本年も獅子座流星雨が相當著るしかるべしと豫想された爲か、十一月の觀測者、觀測數ともに多數に上つた。上記流星雨の活動期間中は概して天氣良好、特に極大期に當る16日～18日は各地とも好天に恵まれ充分なる結果を得られた事を會員とともに喜びたい。觀測全集計を下に示す。

觀測者數	27+(7) *
觀測延日數	141
觀測時間	16934分(282.2時間)
觀測總流星數	5867個

(* (7) は觀測班の數を示す)

此の外に、火球及少數の流星觀測を送られたものが數名あつた。

詳細な報告は花山ブレテン第301號に載せてあるから其れを是非見て貰ひたい。其中で

第一表は觀測者別の觀測概要を示すものである。

第二表は各觀測者別に各日の觀測結果を示すものである。備考欄に獅子座流星の數を記入して置いた。

第三表は獅子座流星群のみの觀測を日付の順に整理したものである。數の字を附したる觀測は數へたるのみのものである。**第一圖**は各日の平均數をグラフにしたものである。これ等の結果を綜合すれば、出現は十一月初旬3日～5日に始まり、15日より著しく其の數を増し17日に於て明瞭なる極大を示した事が看取せられる。本年の出現程度を1932、1933年に於ける出現程度を比較すれば1932年に比すれば可成り劣つたものと認められるが、1933年とは大差なきものの様であつた。流星の光度も1932年のものに比すれば幾分低かつたものと思はれる。

第四表は16日、17日、18日の十分間毎の獅子座流星の數である。17日に於ては3時前後及5時前後は他に比してやゝ流星の多かつた事が認められる。

第五表は十一月中の觀測より得たる輻射點を示す。表によつて知らるゝ如く獅子座流星群の外、牛座、雙子座其他に輻射點を有する流星群がある。

第六表は十一月中に觀測されたる大流星の表である。獅子座以外のものが可成り多く含まれてゐる。

第七表は同期間中の同時觀測によつて得られたる流星の實經路を示すものである。合計 30 個のものを得てゐるが出現點消滅點とも平均より $\pm 5\text{Km}$ 以内で一致せるものは 9 個にすぎない。實經路の決定方法は解析的方法によらずすべて圖解法によつた。觀測の實情と觀測視經路の關係とによつて一樣なる方法は採れなかつたので、各個別に最も適當したる方法を採用した。又百軒より見たる流星の修正光度を示した。地平近くの流星には大氣による光度の修正を施した。

〔附 記〕

本整理をなすに當つて吉井耕一氏の助力によるところが多であつた記して感謝の意を示すものである。

流星課長 小 槇 孝 二 郎

〔誌 上 急 報〕

ヘルクレス新星は二重星

嘗て、1928年畫架座新星の時にも愕かされた事であるが、今回のヘルクレス座新星も二重星であることが知れて、最近學界を驚かしてゐる。これは去る七月4日米國リツク天文臺の Kuiper 氏が發見したもので、その後同23日佛國ムドン天文臺の F. Baldet 氏も觀測確證した。

即ち下の通り

カイパー氏	位置角 $\begin{cases} 134^\circ \\ 140^\circ \end{cases}$	角距離 $\begin{cases} 0.2'' \\ 0.2'' \end{cases}$	光度差 $\begin{cases} 0.6 \\ 0.5 \end{cases}$
バルデ氏			

但し、この觀測には大望遠鏡と 1000倍以上の倍率が要る。

(花山急報 169 より)

太陽課 黒點相對數報告 (1935年七月)

觀測者(觀測地)	松本(臺灣臺中高女)	權邊(朝鮮忠清北道)	渡野(松山師範學校)	日發(神戸市須磨區)	改發(神戸市灘區)	崔部(兵庫縣雲雀丘)	伊達(大阪府岡中學)	佐々々(京都市下京區)	前田(滋賀縣中里村)	木邊(宇治山田市)	尾崎(名古屋西區)	小澤(長野縣青木村)	沓掛(静岡縣島田町)	清水(神奈川縣及川)	森久保(神奈川縣及川)	淺井(橫濱保土谷區)	水谷(東京市本郷區)	稻垣(東京市芝區)	服部(東京市大森區)	山崎(岩手縣水澤町)	下保(札幌市豐平町)
鏡徑耗	58	80	41	98	150	75	80	110	70	75	30	32	102	100	45	58	38	75	50	58	58
倍率	40	51	55	69	68	77	70	92	40	60	50	55	75	72	60	60	50	30	44	50	44
1	42	欠	雨	14	24	30	雨	30	曇	25	42	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	21
2	40	雨	雨	雨	曇	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	雨	28
3	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	19
4	30	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	26
5	35	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	23
6	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	40
7	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	24
8	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	36
9	67	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	51
10	63	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	49
11	55	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	54
12	58	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	64
12	78	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	79
14	旅	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	63
15	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	55
16	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	59
17	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	44
18	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
19	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
20	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
21	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
22	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
23	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
24	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
25	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
26	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
27	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
28	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
29	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
30	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
31	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	忙
日數	52	23	37	43	36	41	41	40	44	35	38	39	43	33	32	27	59	35	35		
平均	9	14	7	17	21	28	24	29	14	26	28	23	22	18	51	15	11	17	26		

●清水、山崎兩氏の寫眞觀測の日は斜字で示してある。

●朝鮮忠清北道の權泰燾氏が新しく課員として參加された。

●静岡縣志太郡の大石辰次氏が今月から報告を送られるが、同氏の希望により本欄に報告は今は見合せる。